コンピュータ or コンピューター [*]

渡部 善隆 [†]

1　外来語の表記

‘computer’ という英語をみなさんご存知だろう．‘computer’ のカタカナ表記は，すっかり日本語として定着したと言ってよい．ところで，‘computer’ をカタカナで書く場合，あなたは「コンピューター」と書くだろうか，「コンピュータ」と書くだろうか．それとも，カタカナではなく「計算機」「電子計算機」と書くだろうか．まず，大学生協書籍部に行き，英和辞典を立ち読みし，computer の項を引いてみた．すると，

コンピューター	コンピュータ
アンカー英和辞典（学習研究社）	オックスフォード英和大辞典（福武書店）
研究社・新英和大辞典	プログレッシブ英和中辞典（小学館）
小学館・ランダムハウス英和大辞典	
ウェブスター英英和辞典（日本ブリタニカ）	
旺文社・英和中辞典	
グローバル英和辞典（三省堂）	
講談社パックス英和辞典	

一般の英和辞典では「コンピューター」優勢である．それでは，次に ‘computer’ が大いに関係する情報処理用語集をセンターの図書室で調べてみた．すると，

コンピューター	コンピュータ
JECC コンピューターノート (日本電子計算機)	コンピュータ教育標準用語事典（ASCII）
岩波情報科学辞典	情報処理用語辞典（日本理工出版会）
	コンピュータ用語辞典（日刊工業新聞社）
	情報処理用語事典（オーム社）
	コンピュータ・ソフトウェア事典（丸善）
	共立総合コンピュータ辞典
	情報処理用語集（富士通株式会社）

専門用語集になると「コンピュータ」が優勢である．この違いはどこからくるのか．本稿は「コンピュータ」と「コンピューター」の表記の違いがなぜあるのかを究明したレポートである．

---

[*]1993 年 7 月 25 日受理

[†]九州大学大型計算機センター・研究開発部

上記の英和辞典には‘computer’の日本語の意味として「計算機」あるいは「電子計算機」という訳語が載っている．学術用語の世界では，外国語に対応した漢字熟語を考え，それを用いることが昔からおこなわれてきた．数学用語を例にとる．

英語	フランス語	ドイツ語	対応する漢字
differential equation	équation différentielle	Differentialgleichung	微分方程式
determinant	déterminant	Determinante	行列式
inequality	inégalité	Ungleichung	不等式

外国語に対応した漢字熟語の表記例（数学）

これらの漢字熟語は，数学用語として完全に定着している．例えば，differential equation を「ディファレンシャル・イクエイジョン」とカタカナ表記する文献はない．

しかし，書きことばとして定着しても，話しことばの世界になると定着の度合が変わってくる．数学のセミナーでは，黒板に向かって説明しながら「この行列の determinant はゼロなので....」などとよく口に出している．determinant の発音は英語の発音ではなく「デターミナント」と，カタカナを読みあげる発音である．

この場合，頭の中で「デターミナント」というカタカナを想定し，それを口にだしているのではない．英語の determinant を考え，それを言おうとしているのだが，前後の日本語の勢いに押されてカタカナの棒読みの発音になってしまう．

ただし，日本語で行なうセミナーなので，聞く方も「デターミナント」と聞けば，その発音に対応する概念をすぐさま考え，かくしてセミナーは発表者が内容でつまずかない限り，つつがなく進んでいく．数学のセミナーでは，相手に意味さえ通じれば「行列式」と言おうが‘deternimant’と言おうがどっちでもよいと私は思う．ただし，発音は日本語の文脈の中でおこなうため，どうしてもカタカナの「デターミナント」や「ディターミナント」をそのままなぞる発音になる．これもまた仕方のないことである．

さて，最近は外来語そのままの表記が多くなった．外国語に対応した漢字熟語を作り出すことに日本人が積極的でなくなったためである．理由は，カタカナ表記への抵抗が薄らいできたからであろう．既にカタカナ表現にも死語が数多く見られる．「ナウなヤングがフィーバー」などと言うと，現在では間違いなく笑われる（笑われなくなる将来があることは一概に否定できない）．

外来語と呼ばれるカタカナ語は「国際情報化時代といわれ，日本と世界の関係が一層緊密になる状況とともに，日常生活の中で増え続け」([1]) る一方である．

‘computer’に対応する漢字熟語である「計算機」も使われなくなってきている．JIS の用語辞典では 1977 年まで「計算機」が‘computer’の日本語表記であったが，1978 年から「計算機」と「コンピュータ」が併記され，現在にいたっている．

ところが，漢字熟語表記という一意の日本語表現が少なくなり，外国語にあわせたカタカナ表現が増えると，カタカナの表記の方法で先にあげた「コンピューター」対「コンピュータ」に代表される表記の違いが表面化している．同じ外国語の表現にあてるカタカナが「コンピュータ」と「コンピューター」の様に，雑誌や新聞によって異なって表記される事例が増えてきているのである．

大雑把にまとめると，英語，ドイツ語，フランス語その他の諸言語にカタカナを対応させ[1]国語とするにあたっての大原則は

[1] 外来語をカタカナで表す習慣は，新井白石が蘭学の著述で組織的に行なった影響である．明治期の外来語の急増に伴って，この習慣が確立した．

- できるだけ原語の発音に沿ったカタカナをあて
- 日本語として違和感のない表現をすること

である．しかし，この二つの大原則を同時に満たすカタカナはなかなか見つからない．まず，日本語にない発音をカタカナで表すのは不可能である．Smith [$smi\theta$] は「スミス」としか書けない．次に，日本語への取り込みの過程で，発音や語形が変化してしまうためカタカナを棒読みしただけではアクセントが全然違うことも問題である．graphic は「グラフィック」とカタカナで表すことがあるが，英語のアクセントが a にあるのに対して，カタカナの「グラフィック」を読む時，どうしても「グ」を強く言ってしまい，「ラ」の部分にアクセントをもっていくのは難しい．また，日本語の会話の中で突然外来語だけを外国語の発音で話すのは間違いなく『こいつはふざけている』と思われる．ラジオの DJ やスポーツ中継で，たまに原語に忠実な発音が聞かれるが，ポピュラー・チャートの紹介やフットボール中継など，かなり例外的な場合である．カラオケで 'はやっている' 歌（適切な表現ができない）には，日本語と外国語が入り交じるものが多い．ただし，これも曲があるから（一部を除く）稚拙な歌詞が救われている面がかなりある．また，歌詞自体が短く切られ，かつメロディーにのってポンポン続くので，それほどの違和感がないこともある．試しにカラオケボックスに行き，音のボリュームを全部絞って，歌詞だけ朗読してみると面白いだろう．誰もしないと思うが．

外来語としてカタカナ表記された時点で，その外来語は日本語であって，原語と発音が似ている単なるカタカナくらいに考えていないと，そのまま発音すれば原語の発音になると思って失敗するケースが多々生じる．それでは，外国語を文章の中にそのまま入れ込んでしまえばどうだろう．これも，例えば縦書きの日本語の文章に外国語を原語で挿入したら，ほとんどの場合，外国語に遭遇する度に本を９０度回転する必要がある．小説や評論など，専門書を除く一般の単行本が縦書きである現状から，増え続ける外国語の表現について，適切なカタカナをあてることが必要である．

2 コンピュータとコンピューター

ここでは，九州大学大型計算機センターに関係深い外来語を中心に，カタカナ表現の違いを見ていく．なお筆者には言語学的な検証，分析を行なう能力もやる気もないため，以下現状の表面的レポートに終始する．

まず，サンプルとして 5 つの英語 computer, memory, user, printer, interface を挙げる．次に，この英語のカタカナ表記を掲載している雑誌，書物を調べる．

- 『imidas 別冊付録，外来語・略語辞典』([1]) マスコミ代表
- 『情報処理ハンドブック』([2]) 情報処理学会編集，学会代表
- 『日経コンピュータ』 1993 年 7 月号．専門雑誌代表その 1
- 『ASCII』 1993 年 7 月号． 専門雑誌代表その 2
- 『JIS ハンドブック，情報処理用語・コード編 』([3]) 技術者代表

結果は次の通り

	imidas	日経	ASCII	情報処理	JIS
computer	コンピューター	コンピュータ	コンピュータ	コンピュータ	コンピュータ
printer	プリンター	プリンタ	プリンタ	プリンタ	プリンタ
memory	メモリー	メモリー	メモリ	メモリ	メモリ
user	ユーザー	ユーザー	ユーザー	ユーザ	ユーザ
interface	インターフェース	インタフェース	インターフェース	インタフェース	インタフェース

上記表以外にも，いくつかの用語を比較した結果次のことがわかった．

1. 情報処理学会の用語と JIS [2]は全く同じカタカナ表記．
2. JIS と imidas とは全く異なる．
3. 専門雑誌はバラバラだが JIS 寄りの表記が多い．

computer 関係の外来語の対立点は，ほとんど次の点である．

原語の語尾が er, or, ar, y で終る時に長音符合「ー」をつけるかつけないか

サンプルでわかるように，imidas では er, y に長音「ー」をあてている．それに対して，JIS ではこの長音「ー」を全て省略している．専門雑誌はつけたりつけなかったりである．それでは，なぜこのような違いが生じるのだろうか．

3 「コンピューター」の根拠 — 国語審議会答申

1991 年 2 月 7 日，第十八期国語審議会は最終総会において『外来語の表記』を決定，文部大臣に答申した．『外来語の表記』答申は 1954 年に国語審議会部会報告が行なった『外来語の表記について』のバージョン・アップと考えてよい．この答申を受けて内閣告示が 1991 年 6 月 28 日に出された．資料集『公用文の書き表し方の基準』([4]) を開くと，内閣告示がものものしく掲載されている．

内閣告示第二号
　一般の社会生活において現代の国語を書き表すための「外来語の表記」の
　よりどころを，次のように定める．

平成三年六月二十八日
内閣総理大臣　海部 俊樹

続いて，『外来語の表記』の性格について次の説明がある．

1. この『外来語の表記』は，法令，公用文書，新聞，雑誌，放送など，一般の社会生活において，現代の国語を書き表すための「外来語の表記」のよりどころを示すものである．
2. この『外来語の表記』は，科学，技術，芸術その他の各種専門分野や個々人の表記にまで及ぼそうとするものではない．
（以下略）

[2]Japanese Industrial Standard：日本工業規格．工業標準化法により，主務大臣が定める，鉱工業品の種類・形状・寸法・構造などに関する規格．日本工業標準調査会が調査を行ない，通産省が認定する．

素直に読めば，「こんな風に書いてね」というお願い程度のガイドラインと考えられる．ただし，「これがよりどころだぞ」という徹底作戦はもちろん行なわれているはずである．国語審議会の答申を受けて文化庁国語課の河上 恭雄 課長も [6] の中で次のように宣言している．

> 学校のほうは，小学校，中学校，高等学校，各学校段階ごとに今回の答申の趣旨をどのように教えていくかということを文部省で既に検討して，教科書ではどうするか，あるいは学校のふだんの教育指導の中ではどうするかということの結論を出していただいております．
> せっかくの答申を国民の皆様方に周知し，よく理解していただくという仕事を政府のほうではこれからやらなくてはいけないと思っております．

さて，肝心の 'computer' である．本文の III.3 の注意 3 として次の原則が掲げられている

> 英語の語末の -er，-or，-ar などに当たるものは，原則としてア列の長音とし長音符合「ー」を用いて書き表す．ただし，慣用に応じて「ー」を省くことができる．
> ［例］　エレベーター　ギター　コンピューター　マフラー
> 　　　エレベータ　コンピュータ　スリッパ

「慣用」という単語が曲者である．'computer' の表記に関しわざわざ例があげられたことから，国語審議会で 'computer' の表記を巡ってかなりの話し合いが行なわれたことがわかる．1954 年当時は JIS 用語でさえ漢字熟語の「計算機」をあてており，当時の報告には 'computer' の表記方法などもちろん出てこない．

結局，審議会の答申にもとづけば，「コンピューター」と書く人にはもちろん正しいことを保証し，「コンピュータ」と書く人にとっては，既に慣用となっているので省略を認める態度を示している．長音とは，ある音節の母音を長くのばして発音するものを指す．たとえば，「おばあさん」の「あ」が長音である．上の真似をして「あ」を「ー」に置き換えると「おばーさん」になる．長音の反対の短音では「おばさん」となり，発音どころか意味まで違ってくる．

ところで，「コンピュータ」と書くことが一般の慣用になっているならば，わざわざ答申案の例で「コンピューター」と書いてあるのはなぜであろう．国語審議会はどちらを正しい表記と考えているのであろうか．それとも，2 つの表記方法が混在する状態を有意義なこととして歓迎しているのだろうか．また，さらりと書いてある「慣用」の定義はそもそも何であろう．

4　悩む国語審議会

先の長音に関しての原則を読むと，国語審議会外来語表記委員会は「コンピューター」「コンピュータ」のどちらの表記でもいっこうに構わない判断を見せている．ただし，答申をまとめる過程の議事録を見ると，かなり悩んでいる様子が窺える．第六回総会議事要録 [5] より，その「もやもや」している様子を抜粋する．

「コンピューター」か「コンピュータ」かというのは，学術用語としてはいろいろ問題があり，電気工学などの方面では一番最後の長音記号を外しているが，他の学問ではまだ長い棒「ー」をつけている分野もあって，専門分野でもいろいろ違いがあるようである．
学術用語の方については，それが実は随分気になっていて，それでここで学術用語を含めて統一ができれば大変いいと思う一方，学術用語の方には「学術用語集」があるので，それで例えば「常用漢字表」だの「現代仮名遣い」の前書きを見ると，専門分野は別だという趣旨のことが書いてあって，それを踏襲するならば，今回も学術用語のことは我々の守備範囲でないということになりそうである．

原則からは「コンピューター」が正しい表記であるが，学術用語としての「コンピュータ」は既に電気工学などの方面では「慣用」となっている．流れとしては「コンピュータ」に統一されそうなので，様子を見ようというのが国語審議会の作戦であろう．前文のその他の項の「外来語，外国語のいわゆる氾濫の問題について」の中で次の記述が見られる

この問題は直接表記に結びつくものではないが，関連する問題として総会を中心に論議をした．必要以上に外国語を使うことは望ましいことではないという意見とともに，必ず自然に淘汰され，必要なものだけが定着していくだろうという意見があった．

「○○の意見とともに△△の意見もあった」といういい回しは，意見が全くまとまらなかったことを意味する典型的ないい回しである．「必ず自然に淘汰される」のは数百年を単位に考えれば全くの正しい意見だと思うが（日本語自体が淘汰される恐れも少しある），現実の混乱に対しては何の役にもたたない．

5 新聞社の外来語表記

-er, -or, -ar, -y に原則「ー」をつける外来語表記は新聞社，出版社の「慣用」となっている．「トレーナー」「インテンシティー」など，少数の例外を除いて各新聞は全て「ー」を付加している．新聞社間には新聞用語懇談会があり，そこで外来語の統一表記の基準が示されている．その経緯は『記者ハンドブック』([12]) に詳しい．

「外来語の書き方」は，昭和二十九年三月，国語審議会総会の報告「外来語の表記」をもとに，新聞用語懇談会で討議を重ね，三十一年発行の「新聞用語集」に初めて収録された．以来数次の改訂が行なわれ，四十五年に「新聞用語集」の別冊として発行，五十一年に修正を加えた．それ以後七年を経過したため，新聞用語懇談会では五十八年一月から，その手直しを始め，五十九年九月別冊を出した．

筆者の手元にあるハンドブックは 1985 年発行分であり，それ以後修正が加えられたり，1991 年の国語審議会の答申を受けて，更に新しい基準が定められた可能性がある．しかし，‘computer’ に関しては，各新聞社は現在も一貫して「コンピューター」を使用している．

ただ，そのむかしレーガン大統領が誕生したとき，マスコミが一斉に「リーガン」から「レーガン」に統一を行なったことを憶えておいでの方もいるだろう．新聞用語懇談会で ‘computer’ のカタカナ表記を「コンピュータ」と決めてしまえば，統一は簡単に可能かもしれない．ただ

し，以下見ていくように，マスコミ用語と JIS 用語との溝は，「コンピュータ」などの例外を幾つか作れば埋まるというレベルをはるかに越えた深刻なものである．

一般の出版社では，著者や雑誌によって「コンピューター」と「コンピュータ」を使い分けている．辞書や辞典に限れば，「コンピューター」と表記する出版社が多く，『imidas』の仲間として，『知恵蔵』『広辞苑』『新明解国語辞典』などおなじみの顔が並ぶ．

外来語表記の原則を明らかにしている朝日新聞の規則を見てみる．『朝日新聞の用語の手引（新訂増補）』([8]) には「朝日新聞４本社で実務にあたっている用語幹事補佐団が記者の意見を集約し，衆知をあつめた」（あとがき）結果が載っている．それによると，外来語表記の原則は

> 外来語は片仮名で書き，できるだけ原音に近く，同時に読みやすい表記を用いる．ただし，慣用の固定しているものは，これに従う．
>
> - 原音（とくに英語）の語尾の er, or, ar などは，長音符合「ー」で表すのを原則とする．
>   (例外) エンジニア，ギア
> - 原語の語尾の y は原則として長音符合「ー」で表す．
>   (例外) ペイ，ホームステイ

とある．他社も社内で同様の用語の手引をもっているはずで，『記者ハンドブック』にあるように新聞用語の統一がされているので，朝日新聞社と変わりないと考えられる．

6　NHK の外来語表記

それでは，ことばに一番うるさそうな NHK(日本放送協会) はどうだろう．国語審議会も答申案作成段階で NHK の表記を参考にしたことを白状している ([4])． NHK には放送文化研究所という研究施設があり，アクセント，濁音など NHK アナウンサーの教育を取り仕切っている．その NHK 放送文化研究所編集の『NHK ことばのハンドブック』([9]) を読むと，まず外来語のアクセントに関してもっともな記述がある

> **Q.** 外来語のアクセントはもとの外国語と同じアクセントにすべきだと思うが，放送ではどうしているか．
>
> **A.** 放送では，日本語として自然なアクセントで発音することにしている．外来語は基本的には日本語の一部であり，そのアクセントも日本語のアクセント体系に従うのが当然と考えられる．外来語のアクセントをもとの外国語（原語）のアクセントと同じにしようとすれば，アクセントだけでなく，発音そのものも原語と同じにしなければ不自然になるだろう．

「外来語は大部分の日本人にとっては日本語なのであって，ちょっとだけ英語やフランス語の香りのする新造日本語だといえる」([7]) ことを NHK は強調している．

その上で， NHK は「コンピューター」と「コンピュータ」について自社の見解を「外国語の表記のゆれ」という題で明らかにしている．

Q. 専門の雑誌などでは「コンピュータ」と表記しているのに，NHK や新聞はなぜ「コンピューター」なのか．

A. 昭和 29 年に国語審議会が発表した「外来語の表記」には，「原音（特に英語）のつづりの終わりの -er, -or, -ar などをかな書きにする場合には，長音記号『ー』を用いる」という原則が掲げられ，ライター (lighter)，エレベーター (elevator) の例が示されている．マスコミはこれを受け入れて，以来，英語の語尾の -er, -or, -ar を長音記号で書くようになった．「コンピューター」の表記はこの原則に従ったものである．
これに対して，「コンピュータ」はいわば専門用語である．つまり，電気関係など一部の専門分野では，以前から上のような場合に長音記号を用いない習慣があった．それが文部省の『学術用語集』で採用されたこともあって，学問・技術関係の出版物では，もっぱら「コンピュータ」と表記されることになった．
同じことばに 2 種類の表記があるのは好ましいことではない．最近は一般に外国語を原音に近く書く傾向が強まってきたが，computer の語尾の -er は短母音だから，「コンピューター」より「コンピュータ」のほうが原音には近い．だから，この例だけで言うなら，「コンピュータ」と書くほうがよいのかもしれない．しかし，それでは -er, -or, -ar はすべて長音記号を使わずに表記すればよいかと言うとそうは言えない．たとえば「メーカー」や「スピーカー」を「メーカ」「スピーカ」と書くと，見た目にも抵抗があるであろう．
要するに，外国語のカナ書きは，原音に忠実なばかりではうまくいかない．日本での慣用も無視できないということである．「コンピューター」と「コンピュータ」のゆれは，マスコミの慣用と専門分野の慣用とがぶつかり，それに原音の問題がからんで，外国語カナ表記の ‘ゆれ’ の代表的事例の 1 つになっている．

この記事により，国語審議会が述べた「慣例」の正体がわかる．つまり，

「コンピュータ」は学問・技術関係の慣例

「でも，『コンピュータ』って決めたのは技術関係の人が先でしょう．やっぱり，先に決めた方の慣例に従って，マスコミも『コンピューター』の『ー』を取った方がいいんじゃない．」と考えるのはしごく自然である．ところが，もしこの技術関係の慣例を尊重すると，NHK の言う「見た目にも抵抗がある」例外を相当数認めることになり，国語審議会の答申は根底から覆されることになる．そのような事態を恐れて，マスコミは「コンピュータ」を使わないのである．

それでは，NHK が言う「電気関係など一部の専門分野」の表記方法はどうなっているだろう．JIS 用語集にその源泉を探った．

7　JIS の外来語表記

‘computer’ をはじめとした情報処理用語は JIS（日本工業規格）の情報処理用語集 [3] にカタカナ表記が掲載されている．JIS 情報処理用語集は，情報処理の規格を定めた基準であり，たとえば，富士通株式会社の情報処理用語は全て JIS 用語に準拠している．JIS 規格を守らなければメーカーとして食っていけないので，用語も当然 JIS の用語を使う．あたりまえのことである．

また，情報処理学会のハンドブックに記載された用語も JIS 用語とほとんど重複している．

ところが，この JIS のカタカナ表記が国語審議会の答申した原則と見事に違っていて圧巻である．『imidas』と『情報処理ハンドブック』の用語がまるで違うのもこのせいである．

[3] には表記の基準が記されていない．しかし，表記の原則は簡単で，-er, -or, -ar, -y に長音符合をあてないのがきまりである．できるだけ原語の発音に近づけるためには，これまでの日本語の慣習を破ることもいとわないという決意が伺える．または，何も考えずに機械的にカタカナをあてたのかもしれない．話を盛り上げるために私は前者の説をとる．

さて，その「長音排斥運動」の成果の一部を『imidas』([1]) と比較してみる．

	imidas	JIS
parameter	パラメーター	パラメタ
picture	ピクチャー	ピクチャ
privacy	プライバシー	プライバシ
timer	タイマー	タイマ
center	センター	センタ
session	セッション	セション
supercomputer	スーパーコンピューター	スーパコンピュータ

ただ，さすがに「コピー」を「コピ」と書いたり，「エラー」を「エラ」とは思い切れなかったようで，長音がついている．ただし，JIS 情報処理用語集でカタカナ 3 文字以上で長音がついていたのは「エントロピー」と「アンダーフロー」などごくわずかである．

筆者の感じを言えば，いくら発音が原語に近いからといって，一律に「ー」をとってしまうのは，既に定着していることばとの違和感もあり，NHK の指摘する通り「見た目にも抵抗がある」のが素直な感想である．もちろん，日本規格協会はこの表記を一般社会の国語のよりどころとして定めたわけではなく，工業規格内の専門用語として決定しているわけで，文化庁の後押しがあるわけでもない．また，JIS 用語集を受けて，「電気関係など一部の専門分野」の人たちが九州大学大型計算機センターに対して「九州大学大型計算機センタ」に名前を変えるようにデモ行進した事実は「センター十年のあゆみ」に見あたらないし，日本規格協会が任天堂に対して「スーパマリオブラザズ」にするよう圧力をかけたり，小泉今日子嬢に対して「スタダストメモリ」に曲名を変えるように指導が入ったという話も聞かない．

私は，専門分野であろうとなかろうと，同じ外国語の表記で異なるカタカナが当てられるのは不自然だし，できれば『imidas』の用語と JIS 用語は同じであって欲しいと考える．

この JIS 用語と国語審議会答申の間で苦しんでいるのは，いわゆる専門雑誌である．実は九州大学大型計算機センター広報もその一つである．これらの身の振り方は次節に譲り，以下長音排斥に対する不満の声を紹介する．国語審議会の原則を敢然と無視した「電気関係など一部の専門分野」の人たちに対する不満の声を集約すればこうなる．

> 「原語の発音に近づける目的で長音を追放した目的はわかるけど，日本語としてちょっと変じゃない．結局カタカナで書いたって日本語だしさ．」

まずは，穏やかな危惧の念の表明である．これは JIS 用語に対する不満というより，外来語の濫用に対する警告である．国立国語研究所長の水谷 修 氏は [7] において，外来語は所詮日本語であり，原語と結びつけて考えるだけでなく，なぜ使うのか，どう使うのかを追求することが重要であると説く．

外来語の問題は使い手に視点を置いて考えるだけでは不十分だ．外来語が使われることによって影響を受ける人々のこと，どんな社会集団で使われるかということも課題追究の対象としなければならない．
（中略）
外来語を外来語というひとくくりの枠で扱ってしまうことにも問題がある．専門用語としての外来語は当然存在すべきであるし，その場合は，漢語や和語と同じように，特定の人たちの効率的コミュニケーション成立のために用いられるものであってほしい．
しかし，だれにでも分ることばとしての外来語は，ひとりでも多くの人に抵抗なく受け入れられるものの範囲にとどめるべきである．

次に紹介するのは，JIS の定めた情報処理用語集を無視する出版社である．第 1 節の 'computer' の調査でもわかるように，大多数の情報処理関係の辞典は，日本規格協会の定めた JIS 情報処理用語に準拠するのが普通であるが，JIS 用語を頭から無視した珍しい辞典がある．岩波書店発行の『岩波情報科学辞典』([10]) である．その巻頭において，JIS 用語の無視を堂々と宣言する．

外来の術語・用語のカタカナ表記については，例えば 'コンピューター' を 'コンピュータ' と書くなどのように，語の末尾の長音符は省略される傾向にあるが，本辞典では一般用語のカタカナ表記の慣用に従い，省略しなかった．

岩波文庫で育った人たちは「カタカナ表記の慣用では『コンピューター』が正しい！」と岩波書店に言い切られると考えてしまうだろう．ちなみに，私はハヤカワミステリ文庫で育ったので考えない．

最後の批判は「けしからん」という強烈な意見である．国立民族学博物館長の梅棹 忠夫 氏は『コンピューターの宇宙誌』[11] において，紀田 順一郎，荒俣 宏 両氏との対談で次のように述べている．少し長くなるが，面白いのでフォントを小さくして紹介する．

Vector Processor VP2600/10

紀田　「computer」という言葉を書く場合に，「コンピュータ」と切りますか．それとも「コンピューター」と音引きをつけますか．

梅棹　「コンピューター」です．私はね，「コンピュータ」と切るのはけしからんと思っています．いったいどういう根拠で，日本語を勝手に改変するんでしょうか．

紀田　通産省がつくっている学術用語の表記基準にあるんですね．別にこうしなさいといっているわけではないんですが．

荒俣　私はいまから二十年くらい前のプログラマーですけれど，「コンピュータ」にしなさいといわれましたね．「ター」とのばすなと．

梅棹　コンピューター関係の人はみんなそうですね．どういう根拠にもとづいているのですか．日本語では，英語の ter などでは音引きを書くというのが原則なんです．なぜそれを省くのか．よくわからない．そこにどういう法則があるんですか．それだったら，マスターキーは，「マスタキ」になりますよ．それでいいんですか．

紀田　ピッチャーは，「ピッチャ」にならなくちゃなりませんね．コピーは，「コピ」になりますね．

梅棹　どういうことなんでしょうかね．日本語としてのシステムをコンピューター技術者が勝手に変える権利はないはずなんです．

荒俣　また，某アメリカ企業の影響だとか，某省の指導だとか，いろいろな怪説はとびまくってましたけれども．しかし翻訳語の世界だと，短いのはどうもアメリカ系の発音なんですね．アメリカ人の技術者とコミュニケーションができるように，なるべく音が近いものを選んだのがどうもいちばん最初のきっかけじゃないかと思うんですが．「コンピューター」と日本人がいうと通じないけれど「コンピュータ」と発音すると割合通じやすくなると．

紀田　言葉の美観というものがありますから．「タ」で切ってしまうとなんだか，軽薄な感じがしてしようがないですね．しかし，ちょっと調べたんですけれど，品位をそこなわないかぎりは，音引きをやめるという決まりがあるそうなんです．ピッチャーは「ピッチャ」で切ってしまうと品位が落ちるから音引きをつけろとか．

梅棹　何をいってるんでしょうかね．どこが品位が落ちるんですか．私にはわかりません．

荒俣　たしかに長音で音引きをいれるということでは，たとえばギリシャ語をカナ表記に直すときはあまり音引きをいれません．アリストテレースとは，あんまりしませんね．

梅棹　そうですね．インド語もそうですね．言語によりますけれど，チェコ語，ハンガリー語は長音と短音の差がはっきりしていますから，これを省略したらほんとうに困りますよ．タイ語も対立がはっきりしています．

荒俣　だとすると，音引きを除いたら，混乱の極みになりますね．

梅棹　混乱の極みですよ．その点，英語は長音と短音の対立がきわめて曖昧ですね．

荒俣　英語は，イギリス，アメリカ，オーストラリアで長短むちゃくちゃに使われていますから曖昧ですね．

梅棹　英語は母音の長短が曖昧な言語ですが，日本語では長短がはっきりしています．音韻的対立がありますから．「コンピュータ」という表記は日本語を破壊するものです，けしからんというんです．もう技術者の専横というか独善というか，ひどいです．

荒俣　ほかの専門用語も同じですね．専横以外のなにものでもないですね．

梅棹　日本語を破壊している感じです．

『コンピューターの宇宙誌』(株式会社ジャストシステム) より

8　折衷案

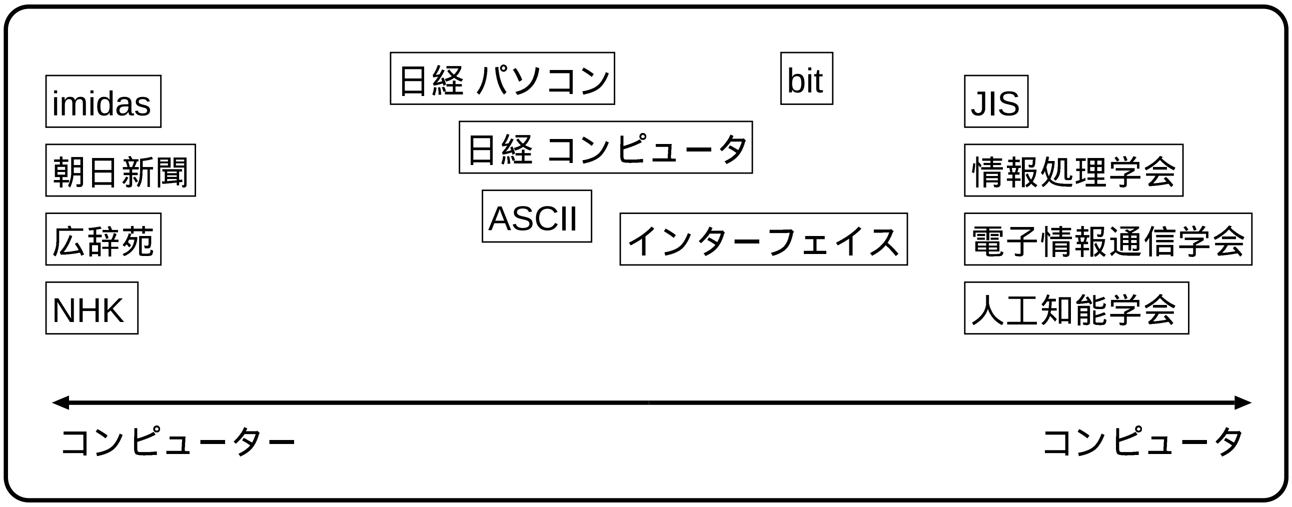
国語審議会答申とそれを受けた新聞，報道の用語と，JIS 用語集とそれを受けたメーカー等の情報処理用語との間に「コンピューター」と「コンピュータ」に代表される対立があることはこれまで見てきた通りである．では，この 2 つの用語規則を同時に尊重しなくてはならない立場のいわゆる専門雑誌はどのようなスタンスをとっているだろうか．センター図書室にある各雑誌をパラパラめくって用語を調べた結果では，原則語尾の「ー」を削除することで一致している．例えば「プリンタ」「プログラマ」「プロセッサ」などである．ただし，3 文字のカタカナに「ー」を付記するか付記しないかで表記にばらつきがある．「メモリー」or「メモリ」，「ユーザー」or「ユーザ」，「メーカー」or「メーカ」などである．2 文字カタカナに「ー」をつけることは，全雑誌一致している．「コピー」「ツリー」などである．

なぜ 2 文字に音引きをつけ，4 文字以上でつけないのか．また，3 文字で音引きをつけたりつけなかったりするのか．明確な基準を示さないと，先の対談のように「日本語としてのシステムをコンピューター技術者が勝手に変える権利はない！」と怒られる．

そこで，情報処理用語集で外来語表記の基準が書いてあるものを捜してみた結果，きちんと基準が記されている事典を見つけた．

文部省と通産省が共同管理する財団法人にコンピュータ教育開発センターがある．この財団は，学校における computer 利用促進のための基盤的技術を研究開発する機関として 1986 年に設立された．この財団監修で『コンピュータ標準用語事典』が株式会社アスキーより刊行されている ([13])．この事典は全国市町村教育委員会連合会や日本教育情報学会などの推薦を受けている．従って，学校教育で教えられる用語の基準と考えてよいだろう．

[13] ではカタカナ表記について次ページの原則を打ち出す．



語尾に長音をつけるかつけないかマップ (computer 用語)

外来語の表記については，国語審議会報告「外来語の表記」を原則とした．しかし，外来語表記法は，時代とともに変わりつつあり．一定していない．その上，特にコンピュータ関係の用語には，日本語に置き換えにくい専門的な技術用語が多く，さまざまな表記法が用いられているのが現状である．そこで，本書中のカタカナ表記については，次の考え方を基本とした．

1. コンピュータ関連用語のカタカナ表記は，JIS による情報処理用語の表記例を尊重した．その表記例のない用語については，JIS の通例およびコンピュータ業界での一般的な表記などを考慮しながら，4. 以下のようにした．

（略）

4. 英語の語尾の -er, -or, -ar, -y, -ture などをカタカナ書きにする場合の長音符合 (ー) は，

a. その語のカタカナ部分が 3 音以上のときには付けず，2 音以下のときには付けた．

例： `player` → プレーヤ　　`monitor` → モニタ
　　 `copy` → コピー　　`key` → キー

b. 拗音 (ャ,ュ,ョ) は 1 音として数えないので，次のような場合には付けた．

例： メニュー

c. 複合語は，それぞれの語について，上記 a, b に即して対応した．慣用的に 1 語として通用している複合語も同様である．

例： `overflow` → オーバフロー
　　 `interface` → インタフェース
　　 `interactive` → インタラクティブ

（略）

9. 例外

a. 前記 4. の例外として，一般の慣用レベルが先行していると思われるものは，一般的な表記方法を尊重した．

例： ユーザー（× ユーザ）　メーカー（× メーカ）
　　 スーパー（× スーパ）　パラメータ（× パラメタ）
　　 プライバシー（× プライバシ）　など．

b. 前記の慣用とは異なった表記が先行しているものは，例外とした．

例： ハイパーテキスト，ハッカー，カルチャーセンター，
　　 タイムリー，テクノロジー，リーダーシップ，
　　 リテラシー，カテゴリー，クラスター　など．

現在 computer 関係の出版物は，大体上に近い基準で外来語表記を行なっている．一律に「ー」をつけたり，「ー」を全くとってしまったりはしていない．ただし，「一般の慣用レベル」をどのように認識しているかで表記に差がでる．上の基準と異なり，「メーカ」や「ユーザ」と表記している専門雑誌も多い．とくに，このカタカナ 3 音の場合の「ー」の付記の有無

は，見た目にみっともないかどうかを各人の感覚に委ねるという混乱の状態にある．

私の個人的な意見では，カタカナ３文字には原則長音をつけて表記すべきだと考える．理由は２つあって，１つはカタカナ３文字で長音を付記する外来語で既に日本語として定着したと考えられる言葉が比較的多い点である．例を挙げると，サッカー，ダービー，タイマー，タンカー，ダンサー，ハンガー，ハンマー，ペーパー，ポーカー，ボクサー，マスター，マフラー，メーター，モーター，ランナー，シャワー 等々である．第二の理由は，例えば「メーカ」のカタカナを会話の中で声に出す時，たいていの人が「メーカー」と発音しているからである．外国語の発音に近い発音をするため「ー」を切ったからには，きちんと発音すべきである．それができない以上，長音符合をつけるのは当然である．

さて，カタカナ４文字以上になると考えてしまう．文字が多くなって，語尾に長音がなくても勢いで押し切ってよさそうな反面，対談で批判にあがった「軽薄」な感じは否めない．ウイスキー，カレンダー，スピーカー，エネルギー等の長音をとって，ウイスキ，カレンダ，スピーカ，エネルギにすると，少し変である．皆さんも悩んで欲しい．

では，当九州大学大型計算機センターはどのような表記を行なっているか．前々ページのマップの位置を決めるとすれば，センターの表記は ASCII よりも少し JIS よりというところである．原則 JIS 用語に準拠し，かつ一般の慣用も考慮するという申し合わせが一応あり，原稿を集める専門室で一応のチェックを行なっている．しかし，「こうした方がいいよ」くらいの指導であり，結局原稿の執筆者は各自の判断でカタカナ表記を行なっている．それでも，マニュアル類の記述や，専門雑誌，解説書などを参考に，大体皆同じような表記を使っている．

ただし，統一されていないカタカナ表記もある．「パラメータ」vs「パラメタ」，「セッション」vs「セション」は広報記事や各手引で異なって記述されている．たとえば『利用の手引・TSS 編』は「セション」であり，『利用の手引・MSP コマンド編』は「セッション」である．読者の誤解を払拭しておくと，センターも組織の「慣行」に習い，色恋沙汰や仕事の方針で人間的な対立が少しはあることを否定することが困難な状況であることを認識せざるをえないが，この表記の違いはそのようなこととは一切関係ない．執筆者の「慣用」の認識の差である．

9　おわりに

実はこの原稿を書き始める段階では，基準なんて簡単にできると思っていたが，「『コンピュータ』と表記することは日本語を破壊する」という意見と，「外来語表記法は，時代とともに変わりつつある」という意見の接点のない対立には，日本語の長音，短音に対する深い考察と，これまで紹介した表記基準すべてが唱える「慣用」とはいったいなんなのかの理解がない限り，この議論に割って入れないことに気がついて，慌てて撤収することにした．

最後に，語尾の長音符号を取り去った野球記事をあげる．できれば声に出して読んで頂きたい．これを読んで不自然さを感じるうちはあなたは「電子計算機」技術者になれない (？).

> ヤクルトの先発ピッチャはルーキながら即レギュラ入りを果たした伊藤．初回こそスラッガの４番バッタのオマリにセンタオーバのタイムリヒットを浴びたが，キャンプ中にマスタしたシンカとスライダを用い，後続を打ちとった．その後もランナを許さず，元気のないタイガス打線を押さえた．

参考文献

[1] 「国際情報化社会の最新版外来語・略語辞典」情報知識 imidas 1993 別冊付録, 集英社,

1992.

[2] 「新版 情報処理ハンドブック」情報処理学会編, オーム社, 1980.

[3] 「JIS ハンドブック 情報処理 用語・コード編」日本規格協会, 1990.

[4] 「外来語の表記」 国語審議会・外来語表記委員会答申, in 「公用文の書き表し方の基準（資料集）増補版」, 文化庁, 1991.

[5] 「国語審議会報告書 １７」, 文化庁, 1989.

[6] 「『外来語の表記』の答申を振り返って」 文化庁月報, No.272, 1991.

[7] 「現代社会と外来語」水谷 修, 文化庁月報, No.272, 1991.

[8] 「朝日新聞の用語の手引（新訂増補）」 朝日新聞社, 1989.

[9] 「NHK ことばのハンドブック」 NHK 放送文化研究所編，日本放送出版協会, 1992.

[10] 「岩波情報科学辞典」 岩波書店, 1990.

[11] 「コンピューターの宇宙誌」 紀田 順一朗，荒俣 宏，ジャストシステム, 1992.

[12] 「記者ハンドブック・用字用語の正しい知識」 共同通信社, 1985.

[13] 「コンピュータ教育標準用語事典」 コンピュータ教育開発センター監修， ASCII, 1989.

1969 年当時の「電子計算機」の広告